

今世紀の天文学を振り返って

「人は町の、村の、国の顔であり、宝でもある」

弓 滋



は町や村、あるいは国を代表する顔であるとともに夫々の誇りであり、宝でもあるとかねがね思っており、またそうでありたいと願いつけてもいる。しかし、人がいかに闘争を好み、野心家であるかはこれまでの史実として証明されている。残念ながら年から年中、地球上のどこかで必ず闘争、紛争、戦争の類が起こっていて絶えた日がない。20世紀においては世界中を巻き込んだ大戦が再度に渡って起こっており、第1次大戦においては毒ガスの導入が、また第2次大戦においては航空機、長射程距離を誇るロケット砲が、さらに核エネルギーの活用による大量殺人兵器原子爆弾の導入までがあったことは特筆大書に値するものである。これはもう叡知を持つ人間のなすべきことではなく、神をも恐れない所業であると決めつけざるを得ない。

天文学を専攻して、科学者の端くれにでも加えて頂いていると自負している私は近年の科学の素晴らしい発展には驚異の目を見張っており、それを誇りとも思い、またその恩恵も十二分に有難く享受させて頂いている。

あと幾何もなくして終わりを迎えようとしている第20世紀においては人類史上で、これまでに見たこともない程激しい勢いで科学ならびに科学技術が発展した。その恩恵を受けて私たち人類の日常は夢見るかのように豊かになり、この世の春を謳歌して憚らない。

それはそれでよいとしても、人類は原始以来持ち続け、世々受け継いできていた矜持も叡知もどこかに置き忘すれたかのように振る舞っているのは

残念である。

化石燃料石炭を燃やして電気に変え、また罐で燃やして蒸気を作りそのエネルギーを動力源として産業革命が起こった頃はまだよかったとしても、その後燃える水-石油を見つけてからと言うもの、それはただ単にエネルギー源として活用するばかりか、化学工業は各種の石油製品を作り出し、人類の日常生活必需品の多くが石油に依存するに至った結果、その廃品処理によって生ずるダイオキシン禍は最も有名なものとして忘れ去ることが出来ない。挙句の果ては石油精製品である自動車燃料は年から年中、大気中に炭酸ガスや窒素酸化物を撒き散らして留まることを知らず、地球全体の温暖化を招いている。地球表層土は化学工業が排出する各種有害物質によって汚染され、今では飲み水にも事欠き始めている。

人類はそれが持っている知恵によって繁栄を享受する一方、自らの首を締め上げつつあると断ぜざるを得ない。さらに人類は地球を人類のためにあると思いがり、他を顧みようとしなかったため、他の生物がいかに苦しめられていたかさえあまり反省していなかったらしい。

20世紀における目覚ましい科学の発展と科学技術の向上は人類史上初めてのことであり、生活は極端に向上したが弊害も多く現れて来た。科学は正しく両刃の剣であると言わざるを得ないが、私はこの世紀の84%を生き続けてきたとは言え、私の経験と学識では到底科学と科学技術の功罪を論ずるには、問題があまりにも大きすぎて手に負えそうにもない。私に言えることは《人類は地球人とし

て他の生物や無機物質とともに地球を共有していることを心底から自覚することが肝要である》の一言だけである。

以上の認識を持つことができれば、その人はもはや国どころか、地球の立派な顔であり、また地球の宝ともなることができる。

天文学は余程毛色の異なる学問であるらしく、幸いにいも悪人に悪用されたことがない。強いて取り上げるならば、人工衛星の打ち上げに協力した天体力学の専門家があてはまるかもしれない。地表から 390 ~ 600 km の上空で地球を周回する人工衛星をうまく打ち上げるにはどうしても天体力学専門家の助言協力が必要であった。確かに上記領域には現在無数に近い沢山の用済み人工衛星が

宇宙のゴミとして浮遊しており、将来何とかしなければ収まりがつかなくなると思うが、今のところは何の問題でもない。むしろ通信衛星、気象衛星、天体観測用衛星、科学諸計測衛星など科学発展の基礎となる分野で活躍している点が大きく評価されており、現時点では両刃ならぬ片刃の剣である。

このように考えると、天文学者はこれまで金食い虫の汚名を着せられ、また民生に対してはさっぱり貢献しないではないかという批判を受け、自らも敢えて抗弁もしなかったが、よくよく考えると天文学者ほどクリーンで国の顔に、国の宝に相応しいものはないと思えてくる。さらに進んで地球の顔であり宝でもあり得るとなれば、気分の幸せこの上もないことである。



国立天文台 65センチ望遠鏡

職組製作の絵はがきより